

阿岐のまほろば Vol. 20

さい し ど き かん ごう
祭祀土器と環濠を発見！

あおだに ごう い せき さいじょうちゅうけ
青谷1号遺跡（西条町寺家）



青谷1号遺跡から出土した祭祀土器

青谷1号遺跡は、西条町寺家に所在しており、御建神社から北西へ約500m離れた竜王山の山すそに位置しています。

街路事業に伴って2000年2月から9月にかけて約3,500㎡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、調査区中央を流れる谷や集落を取り囲んでいると見られる溝から弥生時代後期～古墳時代初め頃の土器が多量に出土しました。

これらの土器の中には市内ではじめて出土したものも見られました。

また、珍しい古代の硯も見つかっています。



青谷1号遺跡位置図（1：25,000）

谷に置き去られた祭祀土器

調査区中央を流れる谷の東側から写真1に見られるように多量の弥生土器がまとまって出土しました。写真はこの土器を慎重に掘り出しているところです。すると写真2のように大きな鉢のなかに壺が入れたり、あるいは鉢と鉢がどんぶりを重ねたような状態で多数出土しました。

また、食物や供物を盛る高杯や写真3のように胴の部分に孔がつけられた壺や甕などが何点も出土しています。このように孔がつけられた土器は神や先祖をまつる祭祀に関係していると考えられています。つまり出土した土器は使っているうちに壊れたり、あるいは不要になったりしたものを谷に打ち捨てたのではなく、何らかの祭祀に用いられた後、谷の東側にまとめられ、重ね合わされて置き去られたと見られるのです。遙か昔に生きた弥生の人々が何を祭り、またどんな祈りを捧げたのかは土器だけが知っている永遠の謎です。

土器はその形から弥生時代後期の初め頃（2世紀頃）のものと見られます。



写真2 鉢に入れられた壺



写真3 孔がつけられた壺

県内最新の環濠？

調査区の北側では写真4のように、だ円形にめぐる細長い溝が見つかりました。確認された部分で長さ約50m、幅は広いところで2m、最も深いところで1mを測りました。断面の形は尖った台形ですが、部分的には鋭いV字形となっており、ところもありました。

溝の下からは弥生時代後期中頃（3世紀頃）の土器がわずかに出土し、上からは写真5のように古墳時代初め頃（4世紀頃）の土器が多量に捨てられた状態で出土しました。

さて、このような形の溝は弥生時代中期に西日本各地で見られる環濠とよばれる集落を囲む防御用の溝に大変似ています。広島県内では西条町の助平2号遺跡、深安郡神辺町の亀山遺跡、大宮遺跡などで見つかっています。

これらの遺跡と比較したとき本遺跡の溝は時代も新しく、肝心の住居跡も見つかっていないため、環濠ではないとみられそうですが、多量に出土した土器からすぐ近くに集落跡が眠っていることが考えられますし、次項で紹介します市内で初めて出土した土器の存在は、この溝の内側に存在するとみられる集落が西条盆地内で重要な拠点であったことを示しています。つまり今回見つかった溝は、この拠点的な集落を守るために作られた県内で最も時代の新しい環濠ではないかと考えられるのです。

市内初出土の山陰・畿内の土器

写真4の溝から出土した古墳時代初めの土器の中に、西条盆地以外で作られたものが2点見られました。その土器は市内で初めての出土であり、溝の性格を考える上で大変注目される存在です。

まず、写真6左側の壺形土器に寄り添うように出土しているくびれのある土器は、現在の県北地域を含めたかつての山陰地方で多く見られるつづみがたきだい（つづみ）という祭器です。器台とは第1図に示し



写真4 環濠と思われる溝

たように供物を入れた容器を乗せる台のことで、出土状況から考えておそらく左側の壺形土器がこの器台の上に乘っていたものと思われます。つまりこの溝で囲まれた集落では、西条盆地（安芸地域）の壺と山陰の器台を合体させた祭祀が行われていたのです。これは西条盆地と山陰地方との交流を祭器の合体という形で象徴的にあらわしているとみられ、この集落がその交流の場となっていたわけです。

また、写真7の丸底の甕形土器は表面に煮炊きに用いたことを示す、焼けた跡が残っている一見なんら変哲もないものですが、現在の奈良県を中心とする畿内地方がルーツとなっている布留式土器とよばれるもので、安芸地域でもほとんど出土していません。

これらの土器はこの集落内においてその地方からやって来た人々によって作られた可能性もありますが、山陰ならびに畿内地方の人々と西条盆地



写真5 古墳時代の土器群

の人々の交流がこの地で行われていたことを示す貴重な証拠であることに変わりはありません。

このように地域を越えた交流の場となっていた集落であるため、前項で述べたような溝で取り囲んで厳重に守る必要があったのではないのでしょうか。



写真6 出土した壺形土器と鼓形器台



第1図 鼓形器台の使用法想定図



写真7 布留式土器壺

えんめんけん 役所？それとも寺？円面硯出土

写真8の古代の硯・円面硯はその名のとおりに円い形で、奈良時代（8世紀頃）のものと考えられます。長く使われたのでしょうか、墨を磨った面はツルツルになっていました。また、円面硯の周りの破片は須恵器の蓋や杯を硯代わりに用いた転用硯といわれるもので、墨の痕跡も観察できます。これらの硯は調査区付近に古代の役所あるいは寺跡が存在する可能性を示しています。

円面硯は市内では高屋町の西本6号遺跡、新住西1号遺跡について3例目の出土となりました。



写真8 円面硯と転用硯

平成6年3月の第1号以来、足かけ7年で第20号の発行を迎えることが出来ました。この間「次号はまだ？」という皆様のありがたいお問い合わせの声を多数いただきました。調査の進捗に合わせての発行のため、不定期刊となっておりますが、少しでも早く調査成果を皆様にお伝えするため、これからがんばってまいります。今後とも、当センターの事業に対するご理解、ご協力をお願いいたします。（中山・塚本）

（財）東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol. 20

発行日 2001（平成13）年3月16日

編集・発行 財団法人東広島市教育文化振興事業団 文化財センター
東広島市西条町大字馬木541-1

TEL 0824-25-3880 〒739-0033

印刷 株式会社 ニシキプリント